時報 No.4

1952.6

大阪大學山岳會

目次

第四号

一、季節外れの山　篠田軍治……2
一、北岳概説……4
一、一九五一年　秋山……8
　北岳第二尾根の新ルート
一、一九五二年　春山……17
　小日向より不帰往復
　(一)計画　(二)行動記録　(三)食料
　(四)装備　(五)會計　(六)気象
一、新しい装備の試み……35
　ベニヤ板マットの補足
　無連結気泡スポンヂマット
　珪素樹脂防水
　塩化ヴニールヤッケ
　ナイロンザイル
　薫器
一、山行記録(一九五一・九月―一九五二・六月)……39
一、集會記録(一九五一・十月―一九五二・六月)……45
一、現役部員名簿(一九五二・六月現在)……49

季節外れの山

篠田軍治

登山家と山岳愛好者との区別は山へ登るのにシーズンの存在することを否定する者か肯定する者かで定まつて来るとも云えるようだが、これは日本の山が夏であろうと冬であろうと大低片付いていることから見ると間違いはないであろう。併し現役学生の登山となると休暇の関係があつて、夏、冬春の休暇以外には四月末とか十、十一月のある時期を除くと大きな山行が出来ないのは当然である。そんな関係で、一應夏とか一月、三月の山には経験をもつていても、その中間の時期になるとブランクがあるのは止むを得ない。

昨年の十一月末、尾藤君が令兄と共に穂高へ行つて、何年ぶりという寒さと降雪に出会つた。

そして予定の日が来ても帰つて来ないので金曜集会でも問題になつた。そこで旧部員から出発の日時、予定等を詳しく聞いて検討して見る

（二）

とまだ帰つて来ていなくても差支ない、時期を誤ず脱出をしたとしても、もう一日、二日はかかりそうだと思つて、旧部員達と話合つてみると、上高地から下は簡単であると考えているか否かの違いで帰阪の日の予想に喰違いがあつたことが判かつた。事実は、その翌日帰つて来て、自分の思つていたよりは少し早かつたが、様子を聞いてみると中の湯でスキーを借りて下つたので、中の湯より下は思いの外、道が悪つたとのことであつた。

自分も十一月の山へは長年行つたことがない。嘗て現役時代、十一月の山で雪に会うと一番頭を悩すのは脱出のことであつた。当時の装備では風雪を冒して下ることは危険だと云つても、雪が幾日続くものかわからない。明日も雪なら明日は今日より雪が深くなつているのは当然である。何時脱出するか。これは重大な問題であつたが、こんな事態に出会つた場合の行動のむつかしいことは今でも同じである。併し、我々の時代と違つて小舎には食糧、寝具を備えつけたものが多くなつたので、嘗ての

自分達が自力で脱出しなければならなかつたのと比較して場合によつては小舎に頑張つていて急援を待つということも不可能ではなくなつたわけである。だから無理な脱出をして途中で体力尽きて進退谷まるというようなことのないようにするのが第一であろうが今度の場合のように自力で脱出が出来るならば脱出するに越したことはない筈である。

今度のことで特に感じたことは十月、十二月の山を知つている旧制の部員にも十一月の山は想像の外であるが、自分のように嘗て十一月の山で何回か苦い経験をしたことのある者でも、條件の違つた場合のことは中々想像し得ないことである。余談になるが、昭和九年九月の関西、風水害の朝、自分は新しい柔い毛の靴下をはいて出掛けた。これは多分大阪へ着く頃に大暴風雨になる、そうすれば帰りは当然電車は不通だという訳で、事実そこまでは予想通りであつたが、電車が不通になつたら歩いて帰るという積りで、足に豆を作らないような準備をして出掛けたのであつた。これは大正六年の暴風で東京の郊外電車が数日間不通でその間乗物がなかつたことを思い出して、今度もそうなるものと頭からきめてしまつていたからであつて、その日の午後、電鉄がバスを動員して輸送に努め、お蔭で殆んど歩かずに帰宅することが出来て、バスというものが日本に一台も無かつた大正六年と同じ状態がバスやタクシーの氾濫した昭和九年にも繰返されるものと思い込んだ自分の迂闊さに愛憎がつきたことがあつた。

自分としてもこうしたことには相当注意している積りではあつても、今でも始終到底想像の及ばない事態を常に経験もし、又聞かされている。こうした事柄は誰しも、記録を読んだり、他人の経験を聞いたりして、その知識を土台にして山行をする場合に注意すべきことではなかろうか。記録や経験は勿論貴重なものではあるが、自分の山行の場合に先人の記録や経験の通りの山に出会えるものでもなければ、それ等から想像した通りに万事が進行するものではな

い。日本のように四季の移り変りの劇しい所、特に気候の変り目などでは僅か数日の違いで山の様相は一変することがある。単に同じ季節だから同じような山登りが出来ると考えたら間違いである。五月のような比較的簡単な時期でも雪が消えて偃松が出て来ただけでも、歩くのに非常に骨が折れて数日前に通った人の倍も時間がかかることもある。数日前よりも上も下も歩き易くなったが、中腹のあたりにブッシュが出て意外に手古ずることがある。

こうしたことは自分の山行の場合に常に念頭におくと同時に他人の山行を批判する場合にも注意すべきことで、ある人が簡単に片付けてしまった所を他人が失敗しても、両者の技倆の優劣は簡単にきめられるものではなかろうと思う。

北岳概説

「峠」

徳永篤司

（四）

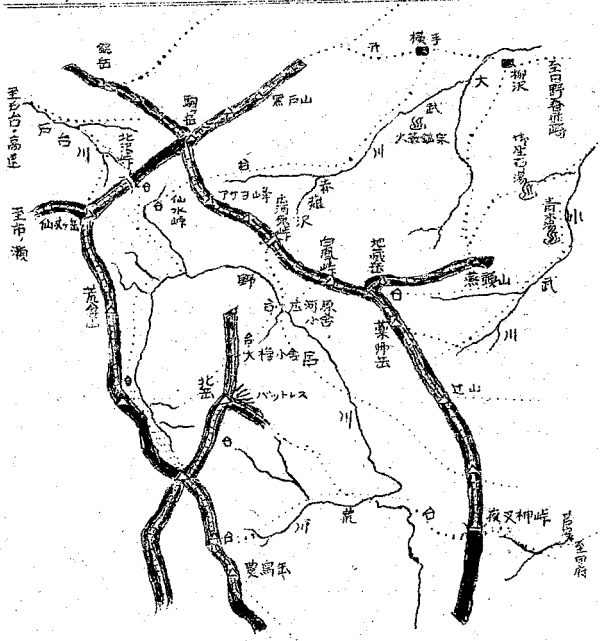
山登りを楽しむ人々は異質的な二つの生活の舞台を持っているといわれる。春おそく、長い登攀生活を了えて麓をめざす私達は、もうすっかり春景色となった四り一面の雑木林の石ころ道をいそいそと靴のコバ金を鳴らしながら、ふと、黒い土に気付いて足を止める。振り返る昨日までの山々は白銀の鋒先を並べて、その上の大空は厳しい青さを湛えている。やがて私達は黄昏の村道を辿り、そこで日々のいとなみにゆき交う村人達をみる。或は、町に出てラヂオ屋の店先を通り、食堂のネオンに足を止める。昨日までの世界は確かに氷と岩で飾られた登攀という一つの世界であった。けれども今、こうして目の前にあるものは、懐しいが、しかし不思議な別の世界である。ゆき交う村人達に、点滅するネオンにしばし融け込み難い戸惑いを覚えるという登山者達の誰もがもっている経験――このことは私達に日常生活と全く不連続な一つの世界を意識させてくれる。この雰囲気は私達が峠を越えて山に向うとき更に印象的となる。

南と呼ばれる山々の味は先ずその夫々の峠のもつ眩惑的な魅力である。大井川を左に三時間、転付の峠に立てば塩見から聖に至る一望の山なみは天龍川から遠々越えて来た昨日までの峰々であり、情熱と傾倒の世界でもある。ここを一歩でも下れば、昨日までの困苦は一瞬にして甘い回想となり、前途にあるものは運ぶ一あし一あしにひしと感ずる明日の世界である。用捨なく投げ込まれる猜性の世界である。現実と、夢にも近いこの二つの世界を鮮かに区切る峠こそは、その奥に静かに「山」を湛える境界でもある。

北岳が私達に示すものは実にこの幾多の峠によって境される幻想的な雰囲気である。戸台を后に約半日、八丁坂を登り切ってぐるりと登高線をまけば、熊笹に敷われた北沢峠は仙水と共に北岳の北面を護る関所であり、早川尾根は南より夜叉神、白鳳、広河原峠と何れもその奥に「北岳」を湛える堰である。額に汗してやっとの思いで此処を越え、前途の激しい登攀に改めて息を弾ませる此等の峠。

分別ある人より分別を奪い、刺戟される事の少い年令にふと情熱をかき立てる悪戯をするのもこの峠であり。幾日かの登攀の后、やっとの思いで北岳バットレスの影響から逃れ、ほっと一息、そして激しかった登攀をしのぶそのひとときを心から味わうのもこの峠である。

駒ケ岳・白峯附近概念図



「廣河原」

一九四九年十一月、北沢峠を越えた私達が野呂川沿いに一日半を費し、水の冷たさを嫌というほど味わつた后に得た広河原はアト、ホームな親しさであつた。

広河原はまこと良い処である。北岳への途、ここに半日でも立ち寄つた人は、バットレスでの何日かの間、次第に増大する広河原への執着に悩まされるに相違ない。それは一種の郷愁にも似ている。事実、大樺沢を眞一文字に広河原に降り立ち、あの河童の標識の前にどつかと坐り込めば、十一月でも日なたは暖く、既に家へ帰り着いた気にしてくれる。野呂川は水かさえ少なければ穏やかな渓流である。丸太の掛け橋に腰をおろして足をぶらぶらさせれば、山影を千々に砕いて流す水の面は飽くまでも澄んで、岩に飛び散る水玉はしばし吾を忘れさせるのである。眼を転ずれば十一月の空は恐ろしい青さを湛え、池山尾根の一隅に初雪に飾られたバットレスがちらりとその岩肌をのぞかせる。そして、食糧さえ許せば再び大樺をつめてバットレスへとつて返せばいいのである。

「白峰御池」

白峰御池（大樺池）と呼ばれる小太郎中腹の台地はそれこそロマンチックな夢の園である。ある年の秋おそく、加藤達と四人、東北尾根を目指して此処を訪ねた事があつた。荒れ果てて傾いた小舎のほとりで、ふとラッセルを忘れて佇んだ古老木の枝ごしに見る北岳バットレスこそはこのとき以来しつかりと刻みつけられて私の脳裏を去らなかつた。それから二年、一九五一年九月下旬、第二尾根を求めて再びここに立つたとき、初雪と紅葉の織りなす北岳は更に迫る美しさであつた。あのとき、雪に敷われて凍りついた御池は、ひやりと冷く光るその面に周囲の峯々を映してぴたりと動かない。その向う、全く倒壊した大樺の小舎から立ち上る一筋の煙が、始めは白く、やがて紫になつてゆつくり

と立ち上り、次第に淡く、やがて消えゆく先の秋空は見るからに穏やかな早川尾根の位稜を夢の様に包んでいた。そのゆるやかで親しみに満ちた眺めは、心の琴線に触れる一種の哀感を誘つた。山登りをする人々が何時も抱いている平凡な疑問がこの様なときふと頭を擡げる。それは食う事も、寝る事も大阪に居ル時は落石を食う心配も雪崩も何もない。がしかし、講議を全部受け、或はバッハやワーグナーに傾酔しての帰り、ヨーギヨーセメントのネオンを映すあの懐しい土佐堀川の通いなれたペーブメントを歩きながら、都会にいては何時も何かが欠けている。そしてそれが山にはあるという悩ましい誘惑。山で、都会でふと起る疑問である。

無言の抵抗と激しい反撥を覚えざるを得ない北岳バットレスと、無條件に愛想の良い鳳凰三山と。この激しいコントラストを一望に見渡せる大樺池の黄昏は、初雪でもかぶれはそれこそ困惑に近い豪華な絵巻物である。

「北岳バットレス」

北岳バットレスはお伽の国の城壁である。岸を越えて野呂川を渡り、大樺沢に迷んだ私達は最后にこのドリーム、ランドの宝庫であるバットレスのディテイルを明らかにする必要がある。大樺沢左股をしばらく上つた堆積の上を垂直に高度を上げて、観光客のために先づ二千八百米の空間でストップしよう。向つて右から重量感そのものの様に突立つ第一尾根主稜岩壁。ガラ、ガラになつて無雑作に上から落ち込んで来る第二尾根。その蔭に片面のみ偃松を附ける第三尾根。そしてここから岩肌がガラリと大柄に変じて、巡洋艦を思わせるスマートな第四尾根。鷲甲肌の第五尾根がずらりと押し並び、夫々がよくみれは全く違つた様相を呈しながら眼の前の緩斜面の広い草つきのバンドに落ち込んでいる。

各尾根の間はガリーを作り、ガリーは沢となり、バンド末端で滝となつて激しく切つて落とされている。容易に登れるのは両端のみであり。これを登つてバンドに達し、夫々の好む尾根

に取り付ける。高度をもう少し上げながら、バットレス中央部に近付いてみよう。

第一尾根岩壁が終つて上部のナイフな偃松のリッヂになるころ、第二、第三尾根は何れも既に主要部分は登り切つて逆三角形の偃松帯に連る安定した岩の緩傾斜に達し、ただ第四尾根のみは三千米でマッチ箱登攀が華々しく始まるという処である。池山尾根末端の二千九百五十のピークが眼下にひれ伏す頃、その彼方に富士が大きく浮び上つて来るのである。三千米以上の高度に於て、雄大なるスケールの登攀が行えるという事は北岳バットレスのもつ最大の強味である。三千二百に登れば、北岳も亦平凡な南特有の優しい線を持つた山となる。緩かに連る仙丈や駒の彼方には、空木やハッ岳も雲の間から顔をのぞけるし、雨股から吹き上げる風が快く頬をなぜてくれる。命をかけて、バットレスのどれかの尾根を登り切つた男達は、しばらく頂上に佇んでいると、やがて数分前までのことが何となく馬鹿々々しく思える様な気にさせられてしまう。しかし、それでも一度バットレスに手を染めた男は、何時かは再び激しい登攀を求めて、ここにやつて来るに違いない。そして、失張り頂上に立つて同じ思いを繰り返すだろう。

北岳が南アルプスの一座である事を止めぬ限り、バットレスがバットレスである限り、そして、登攀も亦内生の登攀の一部である限り。

（一九五二年四月）

北岳第二尾根の新ルート

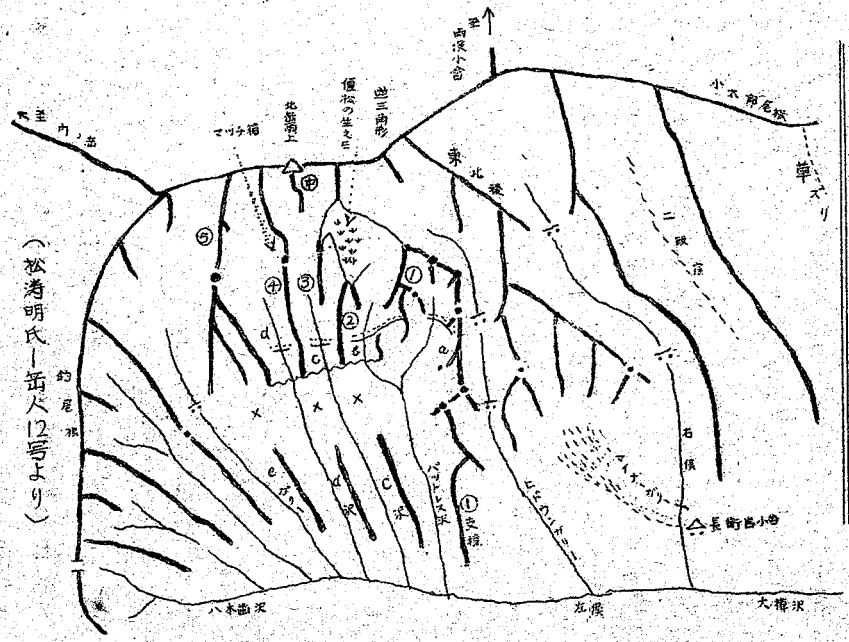
徳永篤司

北岳に対する一九五一年九月、十一月、十二月三回にわたる我々の行動の概要は第三号に略述したので第二尾根と除き詳細は省略し本号の記録欄に記した。北岳バットレス中第二尾根は中央稜と共に夏においても最後迄残されてゐたが、昭和十六年夏登歩渓流会の松涛氏等により第一尾根よりに登られたのが唯一で他に登られた

という話も聞かないと松涛氏は書いてゐられる。（岳人28及び12参照）九月に徳永、細貝により第二尾根をCガリー側よりに登ったのでルート図と共にやや詳しく報告する事にした。

（大馬記）

北岳バットレス概念図



（松涛明氏―岳人12号より）

（パーテイ）徳永、住吉、尾藤、細見、

（記　録）一九五一年九月廿一日大阪発。

廿二日（曇）日野春下車――広河原峠――広河原小舎泊。

廿三日（晴）広河原――大樺池――大樺沢左股岩小舎泊。

廿四日（快晴）第一尾根支稜、第五尾根登攀。

廿五日（終日雨）

廿六日（終日雨夜半より雪）bガリーゴルジュ上より第二尾根側面フエースに取り付き退却、岩小舎を棄て広河原への途中ビバーク。

廿七日（快晴）大樺池泊。

廿八日（晴）第二尾根、東北尾根登攀。九、三〇大樺池――一〇・〇五～一〇・四〇大樺沢二股――一一・一〇～一一・三〇バットレス沢出合――一二・〇五～一二・一〇aガリ出合――一二・五〇～一三・〇〇トラバス・バンド取付――一三・四五～一三・五〇第二、第三尾根間ガリー――一七・〇〇カンテ乗越し――一七・四五～一七・五五北岳ピーク――一八・一五池上尾根落口――一九・〇〇二股岩小舎（東北尾根その他の時間記録は后記）

廿九日（曇后雨）大樺沢――広河原――広河原峠――赤薙滝下ビバーク

卅　日　甲府経由ニテ十月一日帰阪。

無念にも廿八日は私達の感情を無視して晴天と決つた。穏かな早川尾根の辻山の辺りから一筋一筋と輝く光の束が増して来ると、今まで大樺沢を黒々と埋めていた山影がみるみる明るい色彩にとつて代り、やがて力づよい熱と光をさつと投げかけながら、燃える廿八日の太陽が池を照し出した。雨の第二尾根偵察の后に二段滝の下あたりで余儀なくさせられた廿六日のビバークと、当夜にどつさり積つ

た初雪のおかげで、主体的にも客観的にももう一度大阪からやり直さねばならない様な破目に陥っていた私達ではあったが、この天気では残念ながら出てゆかざるを得ないのである。すっかり風邪を引いて頭と喉がやけに痛むし、熱も少しあった。仲々吹きこぼれぬ飯合を前に、一時間近くもじりくさせられている間に九時近くなり、早川尾根を離れた太陽も早や高かった。

大樺池を出発して二股で東北尾根に向う住吉、尾藤のパーティと分れた。

aガリーより先づ第四尾根までトラバースし、時刻が余り亘すぎる様なら引き返して第三尾根を渡る計画でトラバースバンドを渡ったが、第三尾根直下のテラスに到達したときはもう二時近かった。右から、重量感そのものの様に突立つ第一尾根主稜岩壁。ガラガラになって無雑作に上から落ち込んで来る荒々しい第二尾根。そして巡洋艦を思わせるスマートな灰色の第四尾根。

ここうしてバンド上に立ち、ど真中から眺めるバットレスは凄じかった。

第二、第三尾根の間に食い込む急峻なガリーが、バットレス上部の緩傾斜より落込む見事なオーバーハングの壁に依って行手をさえぎられてゐるどん詰りは、第二、第三尾根の側面に囲まれる胸壁をめぐらし、一昨日のbガリー側フエースと此処だけは一本の草もみあたらぬ岩と石のみで飾りつけられた墓場であった。第二尾根の尾根筋の内側に、これと平行な二本のリッヂがガリーから真一文字に上へ登り、恐らく上部緩傾斜のカンテらしい現在ゐる地点からのスカイラインの直下数米でこの二本は何れも消えてフエースに接っていた。スカイライン直下のこのフエースは、ここからみてそれと判るオーバーハングを作っており、これを越さねばいくらまいても何処もかぶっていた。この二本をリッペに持つ背骨に当る尾根通しでさえ、最后は完全に切れているということはこれを右にまいた初登の報告に出ている。二つのリッペの内、取付きの楽な左側は、途中の岩がはずれて、一米ほど水平に切れ、鼻歌の隆起が上からかぶさってルートを断っている。右側のは、下から盛り上

げたのではなく、岩がくずれてガリーが出来たとき、くずれ残つて上から吊り下げられた様な垂直に近いリッヂであり、約五十米から上の個所が岩陰になつていて、そこから果して何う成つているのか判らないのであるが、上部のかぶつたフエースの中に判きりとくの字をえがく凹みがあり、このくの字きりの溝はスカイラインを作るカンテとの交点に切れ込みを作つていた。そこから上の事は全然わからないけれども、若しガリーよりカンテに達し得るとすれば、このルートこそ唯一の可能性を考えさせるものであつた。登山が或る意味で芸術であるとすれば、秋空の下に私達が自由にえがいたルートを、自己の力に頼つて登ることは、命を賭けた一つの美しい創造に他ならない。私達は、この様な一種の創造意慾に駆られて直ちに登り始めた。頂上で日没に会えば、懐中電池で小太郎、草すべりを経由し、広河原に逃げ込む積りであつたが、

それ迄にピークに達し様とするには二時という時刻は一寸おそすぎた。しかし初雪はあつた

が、天気の良いだけにずつと朗らかな気分で取りはけた。一昨日の辛い経験が生んだ第二尾根専用の岩登り術は大丈夫かなと思う様な処でも出来る限り時間を節約してリズミカルに通り、セカンドに当らないと思つた処では思い切つて石を落す事であつた。ただ、ザイルが一杯になつて細見に十米ほど無理をして貰つたとき、堅固くなつた一つバウンドした小石が逃げ場を持たぬ細見の頭に命中した。恨めしそうに見上げる細見の顔を想像しながら、一昨日といい、今日といいトップよりもセカンドの方が辛いという皮肉な岩登りに独りほくそ笑んだ。下から見えなかつた岩陰の部分でリッヂは終り、浮石を置いたテラスがあつて、ここから左右の面が交つて作る凹みが上下に走つている。テラスにがつしりピトンを打ち、残り十米のカンテの乗り越しに細見をトップに立てた。四、五米石手を到する第二尾根のリッヂは、全くの登攀不能を思わせる懸絶さであるがテラスより見れば、このガリーの興より上のカンテを突破出来そうなのは二、三外にな

かつた。カンテ乗り越しより上は依然未知のままであるが、本日の配給ピトン七本がそのまま残つているし、ここまで来れば何んとしてもこれを越さねば嘘だと思えるほどにカンテは近かつた。岩質は一段と悪化し、傾斜も激しくなり、頭上に張り出すカンテの底に依つて完全に局地化された小部分の中で、全力を傾倒しての斗いが始つた。視界の極度に制限されたこの部分は百丈岩でやる日曜日の一寸したトレニング、という気分にしてくれた。テラスを離れた私が、此処を最后と頼むトップ吊り上げのための據点は、がれ残りの上を向いた岩の突起であつた足の両側に下のガリーがむき出しに覗く片足だけのこの足掛りにのみ全重量を置くことはもとより危険である。トップがホールドに使つたピトンを打ち替える事にし、これをハンマーでたたくと小さい岩が一つはづれて簡単にとれた。

たやすくピトンが得られたのは辛しかつたが。楽々と抜けたのは一寸淋しかつた。これを胸の高さに打つことによつて更に不安が増大した。ピトンを打つにつれて、斜に入つた割れ目は次第に大きく口を開き、其処からリスの上部にあたる岩塊が全部どさりとかぶさつて来そうな有様を見ては、残念ながらもうそれ以上打ち込む勇気もなく、止むなくそっとその侵使う事にした。くの字の弯曲部を曲り込んだ細見は、仰向きになつて第五のピトンを打ち、それを使つて左へ、くの字なりの溝がカンテを越える二米下までずり上つて第一回目のスリップをした。一瞬、おびただしい落石を頭にかぶつたけれども、

もしそういう事が医学的にえるとすれば、この落石はちっとも痛くなかつた。生きていたいというぎりぎりの本で智慧をしぼるより仕方がないという局面である。再び振り出しに戻つて第五のピトンを離れた細見がルートを一寸下にとつて斜に底の下をトラバースし、体を伸ばして第六のピトンを叩き込んだとき、后二米余を残して、今や私達の登攀は大詰に達した。残る一本のピトンを音高らかにカンテ上に唱わしてしまえば、最早こちらのものである。

初るはただカンテ上部の好條件だけだった。ザイルをたるまし、第六のピトンに足を掛け、体をぐっと伸したが届かず、手懸りとなりそうな右手のカンテを求めて、三歩近寄ったトップは、ここで、今度は完全に墜落した。トップの叫び声と、抜けて落ちて来る第五のカラビナーの発する金属音と、胸壁の内側に反響する落石音が谷間に消えた刹、反射的にカラビナーにしがみついていた私達が、漸く助かったと気を取り直したとき、足場が消えてしまっているのに気がついた。前のスリップを直接に支え得た第五のピトンが、今度は第六を受けているに拘らずこれだけが抜けたのは、力が正確に抜ける方向に働いた為にも依るのであらうが、しかしこの際、試験ずみの第六のピトンがカンテ乗り越しの前に私達に与えられたのはもっけの幸であったし、カンテの上に何んとか手が届くという目安のついたのも有難かった。落ちて来た第五のピトンを右手に打ってビレーをジッヘルにし、内側だけしかかからなかったが何とかハンマーで足場も応急に作られた。こうして私達は再び態勢を整えた。人間の感情を完全に無視しようとする自然の前に、恐怖心と斗志が秤の目盛の様に左右した。第六のカラビナーを通るザイルがピタリと止ると、前よりも二、三歩高くカンテに近附いたトップが、歯を悲壮に食いしばって基部からじりじりと体を伸ばし、右に体を倒してリスに指を入れた。遂にカンテの上につかまる事が出来たのである。果して第七番目のピトンは刺いた。最后のピトンである。カラビナーをかけ、ザイルを通して一旦オーバーハングの基部にずり降りてから正面の岩に挑んだ細見は、ここでもう一度スリップしたが、このとき木ールドを発見してそのままカンテの上に這い上った。岩の間から覗いた表情がほっとほころびたが、蒼白の顔が再び引き緊って、（残り四十米ほど逆層でジッヘル出来ない）と叫んだ。やっと止っている様なトップに、確実なザッヘルを当にする訳にはゆかない。一喜一憂である。時計は既に五時を廻り、雲は次第に空を蔽い始め

た。両手にカラビナーを握り、トップの荷物を脇にぶら下げ、上ばかり見つめて二時間近く、足首も肩もそれに脱もしびれた。しかし、トップの姿がカンテを越えてスカイラインの向うに消えたとき、私達の登攀はもう終つたも同じであつた。がつしりと三つの岩峰を押し立てる奥横の第四尾根マツチ箱も、こうして見れば羨しい程の安定観があつた。何時の間にか下になつた池山尾根は、その起伏の少い尾根筋にべつとりと雪をつけその彼方に七合目以上の白い富士山が驚くほどの大きさで現われた。二千九百の高度を持つ池山尾根や、鳳凰三山の眼下にひれ伏した右に於て、初めて本格的な岩場の始るこそ、北岳バットレスの持つ最大の強みであり魅力であつた。トップの合図を待つ間、岩登りの醍醐味をしづかに味つた。

カンテの上は最初に思つた通りの緩傾斜であつたが、逆層の上に雪がはいていた。その雪は次第に多くなり、やがて四りが全部白で蔽われてしまつた。偃松に入るや否や、私達は猛然とピッチを上げ、雪をけつて頂上をめざした。稜線の手前でザイルを片付け、午后六時、西俣の側から吹きつける煙で視界のなくなつたピークを素通りし、真白の尾根筋をかけおりて大樺沢に滑り込んだ。バットレスは既に雲に隠されて、私達の登つたところも何も見えなかつた。d沢出合にたどりついてほつとすると同時に落石でやられた右足の腿が気付いた様に痛み始めた。

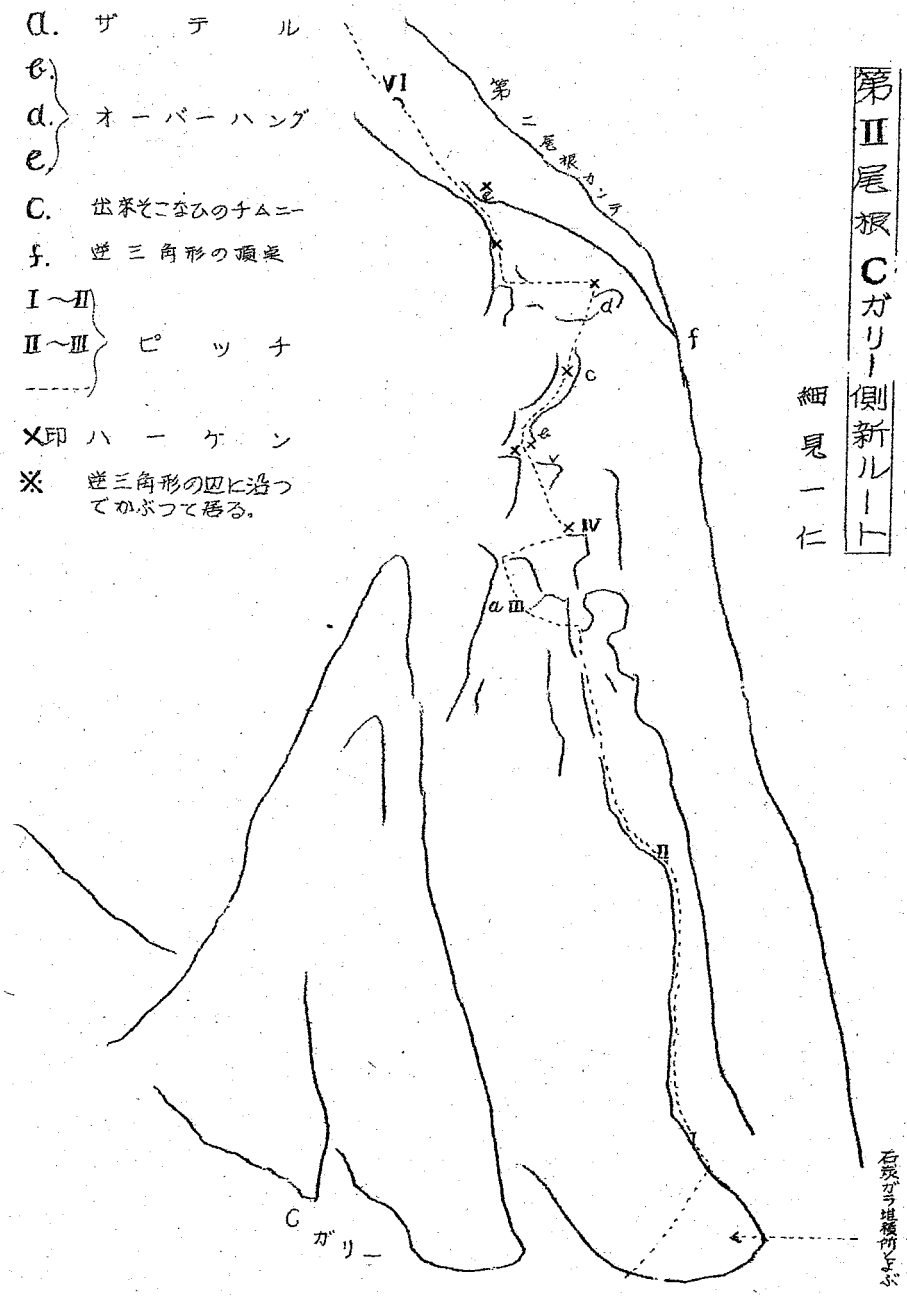
痛む足をひきずつて岩小舎にとび込んだ私達が、東北尾根を登つた住吉と尾藤の二人に迎えられておたがの成功を祝つている間に、何時しかあたりは暗くなつていた。

天候も悪化して来たし、うまいものも殆んど食ひつくした私達には、最早もう一つ何処かを、という様な例の誘惑もおこつて来る心配はなかつた。明朝下ると決めてしまつた后で、今夜を限りの大樺沢は無暗と楽しかつたし、寝心地もよかつた。

（一九五一年十一月）

第Ⅱ尾根Cガリー側新ルート

細見一仁



一九五二年 度春山合宿報告

小日向より不帰往復

家田千尋

阪大山岳会結成を機とし過去に行はれて来た登山は、漸次計画的総合的登山に切り変えられて来た。即ち徳永等が戦時、戦后の社会的悪條件中にも可能としたラッシュ形式の登山は、期間。費用。技術。目標。根據地等、幾多の條件に制約され、会員数の増加に伴ふ下級会員の育成を行ひつつ目標を下げずに行ふ此の種の登山に我々は疑問を抱き、その意味からも厳冬期白馬主稜は多年研究した后立山東面のラッシュに終止符を打つものであった。それ以来我々が現在迄行って来た稜線上の行動は当然の事ながら、サポートの活用。装備食糧配分の拙劣。連絡。行動すべき晴天の把握。高所露営等、徹底的に検討すべきあらゆる問題を与えた。就中高所露営は天幕の不足故に雪洞以外は等閑視され、又我々の単なるアドバンスにのみ用ひて居た悪弊も加はり、一九五一年、五二年度冬山を失敗に導いた最大原因を爲すものであった。そこで比較的長期に、又幾分余裕を以て、全員で此等の諸問題の解決の糸口を見出すべく、極地法を採用し、春山の計画がなされた。

極地法については従来の文献により運営方法を徹底的に研究する事とし、特に戦前より伝統的に之を行ふ早大と、戦后急速に極地法による実績を上げてゐる明大に重点を置き、その他戦前の慶応、京大等の報告を「山岳」その他により歴史的に意義、思想、運営を各会員が研究し、略確信を持ってから具体的計画を建てた。

(一) 計画

始めて行ふ極地法なので場所は我々が地形を熟知してゐる白馬方面になった。会結成以来我々が目標の一つとする積雪期后立山全縦走にそなえ、春のキレット通過を済せた現在不帰を計画に加えるべく扨子双子尾根から唐松往復に定

まつたが、なほ不帰については徳永等の強い提言により事前に鹿島側から偵察を行ふ事が條件となつた。杓子双子尾根は文献並に途中迄ではあるが我々の一九五〇年十二月の行動とによつて地形は完全に近い程熟知して居るが、只、ジヤンクシヨンより上のCII設置場所について疑念があつた。不帰は発見し得れば関学井上ルートによるが、而らざれば従来のルートを踏襲すべく研究された。白馬北俣に入り猿倉小屋をB.H.とし、小日向双子岩にCI、上記ジヤンクシヨン上、出来る限り国境線に近付けてCII、鑓天狗池にCIIIを設置し、各キヤムプは四人用一張づつ、CIは文人用雪洞を併用、全行動日数十一日とした。

行動については。

一、計画自身の運営と食糧輸送の分業。

二、全装備CI荷上完了と同時に、すでに国境線迄のトレースをつけておく事から計画を単純化する。

三、CIII設置后は各キヤムプが計画に従つて自主的に動く、人員交代（主としてCIII）も原則として行はぬ。

四、アタツクは快晴でも烈風の日は行はない。

五、全般的に見て計画の山はCIII建設にある。CI CIIへの荷上は悪天候を犯さず楽な気分で行ひ、CIIIに全力を傾け随時でスピーデイにアタツクを行ふ。

六、各キヤムプ間の荷上連絡は可及的早朝出発を原則とする。

以上を骨子として各キヤムプに要する重量計算の后、之に人員を振り当て行動表を作成した。雪崩の危険は殆どが尾根筋の行動であり、只、猿倉台地から双子尾根東面に取付き小日向コルに至る迄の間を問題とし、従来の中山沢をつめるルートは取らず、側稜を登路とした。

（二）行動記録

メムバー

リーダー家田千尋、尾藤昭二（食糧係）。田島汎（装備係）。川島雄（装備係）。平井主之助。山本光二（食糧係）。東　雄。安戸元。久保三朗。

一九五二年三月十八日
予定により家田は三月十二日大阪を発ち、細野に居た細見、大村と三月十五日より唐松小屋に備在、同十七日不帰偵察を完了し、此の日黒菱に居た久保、及び前日大阪を発つた坪井、山本、
　宍戸と細野で合同し先発隊となり午后から荷物の整理に暮れる。
三月十九日曇后雨
　細野（一〇・〇〇）――二股（一三・〇〇）――細野（一六・〇〇）
四宮は腰部痛の爲計画不参加大阪に帰る。
細見は前日唐松からの帰途の膝部痛の爲休養。
残る五人が七十貫の荷を二台のそりで二股発電所前迄荷上に往復す。そりひきに滑るので細野からのアイゼン着用は前代未聞。
三月廿日小雪
細見依然調子悪く、計画不参加を表明、計画から二人減つたのですぐ大阪に帰り后発隊と連絡を取らせる。
　細野（八・三〇）――二股（九・三〇―一〇・一〇）――取入口（一二・〇〇）
　――猿倉（一四・四〇）――二股（一七・〇〇）――猿倉（一九・〇〇）
人夫二人を使用し、昨日の五名が猿倉に行く塚谷と共に荷上、一回ですまぬので家田、久保、坪井、山本は再び二股へ往復しBHへの殆んどの荷上を終えた。
三月廿一日晴
　BH（一〇・〇〇）――CI（一三・三〇―一四・三〇）――BH（一六・三〇）
第一キャムプ予定地に荷上。中山沢を測行せず沢から上へ二本目の尾根に取付いて双子尾根に出る。奥双子手前のピークの下より中山沢にデブリが出て居た。后発尾藤、田島、川島、東、大阪を発つ。
三月九二日晴
　先、BH（一〇・三〇）――CI（一三・〇〇―一五・三〇）――BH（一六・一〇
　后、細野（一三・四五）――BH（一九・三〇）
ストーブ調子悪く情無くなる程出発が遅れる。
BHパーティは昨日下りに捻挫せる坪井を残し四名で荷上、及びCIを建設す。CIは夏用改造四人用を双子尾根から出た白馬側の側稜上の台地（一八〇〇米）に設け、家田、久保、CIに入り山本、宍戸はBHに下る、午后坪井は単身元気にCI

に入る。
后発四名は残りの装備を細野から荷上しB.Hへ。
三月廿三日雪
B.H（一〇、三〇）——CI（一四、〇〇—一五、三〇）——B.H（一七、一〇）
晴れればCI隊は拓子迄ラッセル、及びCII地点偵察の予定なるも停滞す。久保は卒業式参加の為下山、帰阪。二人は雪洞構築にかかり晩食中に荷上げのB.Hパーティが来たので未完成の雪洞内に荷を整理し、久し振りの再会を一同風雪の天幕内で喜び合ふ。家田、尾藤、安后を残し他は吹雪の中をB.Hに下った。
三月廿四日晴后雪
CI（一〇、〇〇）——奥双子（一四、三〇）——CI（一六、〇〇）
B.H（一一、〇〇）——CI（一六、〇〇）
天幕除雪后、春とも思えぬドカ雪の稜線をワカンでラッセルしながら拓子迄トレースをつける為に出発し、途中猿倉台地のB.Hパーティと呼びかはしながらカンバ平に至る頃から天気はくづれ、奥双子の頭から引き返す。予定の全装備CI荷上完了と同時に拓子岳に至るを得ず、荷上の

途中はもうCIに着いて皆で雪洞建設をしてゐる事だと春気に下りながらCIを見るも人影無く、雪の間に間に枝にとまった小鳥の如く側稜に遅々と動かぬ彼等を発見し急いでCIからトレースをつけに下ると雪風呂に入った様に雪まみれに悪戦苦斗する皆を再びCIに先導し、直ちに雪洞構築にかかったが、昨日掘って荷物を入れた所が全然埋まってしまったのをスコップの先で探出し、八人で交代すればみるみる中に出来上った。雪洞は天幕から十米離れた双子尾根稜線のすぐ下を白馬側に入口を向けて例の片屋根型を掘る。夕食には八人がやっと一所に揃ったのでコムパの后、不帰偵察の結果や、之からの行動予定につき討議した。
三月廿五日吹雪
昨日午后からの降雪は夜中より本格的な猛吹雪になり天幕に入って居た山本は雪洞に逃げ込み居住性の良好を楽しんだが、天幕に残った家田、尾藤は息もつけぬ天幕の除雪に何回か苦労し、寝てはシュラーフもろとも体中ゆり動かされ

て一日を過した。

三月廿六日快晴

先、CI（七、三〇）―奥双子頭（九、〇〇）―ザイル固定（九、三〇）―ジャンクション（一〇、三〇）―CII地（一〇、〇〇）―杓子頂上（一一、四〇―一三、〇〇）―CII（一三、三〇―一四、三〇）―CI（一五、四五）

右、CI（九、三〇）―撵平（一〇、五〇）―CII（一三、三〇―一四、三〇）―CI（一五、四五）

今迄積つた雪は昨夜の風に完全にしまり、快晴の中を今日こそ前途の見通しを得ようと家田、川島は固定用ザイル、標識のみを持ち早々にとび出した。白馬唐松間を一望に収め、奥双子の頭から二つ目のピークの悪場に三十米一本を固定し、ジャンクション附近より問題のCII建設予定地を求めつつ登る。ジャンクションより二つ上のドーム型のピーク上、双子尾根が此処で最后の杓子の肩の登りかからんとする所で大雪渓へは六十度、杓子沢へは四十五度の傾斜を有する地点に絶好の設営地を見出し、約束通り右続パーティに予定地用の赤旗を立て、そのまま杓子岳に向つた。ジャンクションから傾斜を失つた尾根は此処からは杓子フェースの右端となるため傾斜は増大し、ザイルをつけクラストした雪面を前后の行動のため丁ねいに一歩々々大きなステップを切りつつ三十米ニピッチで斜左上に上り、岩の露出した極度にやせた稜を一ピッチですぎると、小さなコルになり再び一ピッチの雪面の登行により尾根は小雪渓に向ふリッゲと共になり、再びやせた雪稜を左上にニピッチ、岩壁一ピッチで杓子、白馬間の国境線を全部見通せる部分に至り、杓子頂上の大きな雪庇の右端を更に一ピッチで頂上に出た。此処からは北岳頂上を思はす黒部側緩傾斜の広い頂上を更に鎖に向ひ最早悪場の無い事を確認し、杓子から下らんとする頃に右続パーティをジャンクション下に認めた。CIIより杓子頂上間のザイル固定を中止しCII地に下つた。尾藤等大名は荷上用の荷物の整理后、CII予定地に荷上に向ひ、CII地で偵察隊と同時になり全員がCIに帰投した。本日で前途の計画もほぼ確信を持つに至つたので今迄混

成であつた全員をCII建設を控えCIII隊尾藤、川島（以上アタック）、山本、CII隊田島、坪井、CI隊家田、東、宍戸に編成す。

三月廿七日晴后雪

CI（九、〇〇）――奥双子頭（一〇、三〇―一一、〇〇）――CI（二、五〇）

早朝から天候の変化を思はせたが今日中にCIIを建設すべく八名がCIIに荷上に向ふ。予定は此の日CII隊及び家田はCIIに入り、翌日CIII隊はCI隊支援の下にCIよりCIIに向ひ、CII隊三名はCIII建設后CIに返り待機連絡に当り、CI隊はCIIへ荷上を行ふ筈であつたが予想通り天候悪化し奥双子の頭に荷を置きCIに全員が帰つた。帰途相談の結果、先日からの積雪状態はトレースを一挙に埋める可能性があり、CIII隊がCIを出発してCIIに至るにはCII迄のラッセルが消された場合、時間的に難があり、又、CII隊が連絡を待たずにCIII建設に向ふ可能性もあり、此の場合CIIIを建設しても即日CIII隊がCIIに入り得ない事も想像されるので予定計画を変更し、明日はCII、CIII隊六名が雪洞を併用する事によつてCIIに入り、その翌日確実にCIII隊をCIIに入れる事にした。

三月廿八日ガス后晴

各隊共

CI（八、三〇）――CII（一三、〇〇）

CI隊

CII（一四、三〇）――杓子頭上（一五、〇〇）――CII（一五、三〇―一六、〇〇）――CI（一七、三〇）

一、五〇〇米以下は雲海の中にあり、登るにつれて眼前のガスの中に霧氷をつけた樺の間から天国の様に国境綾線が蒼空を背景に浮び上つた。やがてガスも去りさんさんたる陽光が心おきなくふりかかる雪の上を今日こそCIIに入る喜びに胸をふくらませ乍らトレールを辿り行く昨日の荷を途中で捨ひCII予定地（二、七〇〇米）に至り直ちに天幕を建設し、CI隊はステップを踏み固める爲に杓子頂上に往復し、他は雪洞構築に専念した。CII、CIII用の荷上げも全部終つたのでCI隊東、宍戸は翌日晴れればガソリンの補給に又、大阪へ廿九日CIII建設の旨連絡のため細野に下るべく指示されCIに下り、大人はCIIに入つた。

三月廿九日曇ガス

CII、CIII隊

CII（八、一五）——杓子（九、〇〇）——天狗池CIII（一一、〇〇—一二、〇〇）

——杓子（一二、四五）——CII（一三、二五—一五、二〇）——CI（一六、三〇）

CI隊

CI（七、三〇）——細野（一一、三〇—一二、二〇）——CI（一九、〇〇）

天候思はしくないがCIII建設すべくCIIから二名づつアンザイレンして出発す。杓子頂上に至る頃から風強くガスも加はつて来たが歩きなれた国境線を鐘をすぎ所々出た夏道をどんどんとばしてCIII予定地（二、七五〇米）の夏なれば池のある天狗平に着き天幕を張る。幾分信州側に寄り、国境線の高さ七、八米の雪壁に妨ぎられた平坦部でCIIよりはかえつて安全感の多い場所である。

カチカチのシヤベルの歯も立たぬ様な雪を苦労して切り、ブロックを積み出したが天候は更に悪化し出し帰途が案ぜられるので後事をCIII隊に託しCII隊三名はアタックの成功を祈りつつガスの去来する中を今日で態勢のととのつた事を喜び乍らCIIに下つた。CI隊はCIII建設を信じ細野に下りガソリンを持つて再びCIに帰つたのが日も落ちた七時、連絡の爲更にCIに下つた家田と翌日の晴を念じつつ夜を過した。

三月廿日晴后ガス

CIII隊

CIII（四、四五）——最低鞍部（五、五〇）——II峯コル（六、二〇）——エボシ岩（II峯A）キレット（八、〇〇）——II峯C（九、一〇）——唐松岳（一〇、一〇）——II峯C（一一、〇〇）——IIコル（一三、〇〇）——最低鞍部（一三、三〇）——CIII（一四、五〇）

CII隊

CII（九、〇〇）——鐘（一〇、〇〇）——CIII（一〇、三〇—一三、〇〇）——CII（一四、三〇）

CI（九、三〇）——CII（一三、〇〇—一三、〇〇）——CI（一四、三〇）——CI（一六、三〇）——CII（一八、一〇）

CIII、隊山本が一時から出発準備をして呉れて居たので予定より少し遅れただけでCIIIを出発した。

天候はよく、東天に赤味がさして電灯は要らぬ程明るかつたが只風のきついのが気になつた。

複を四本天狗岳直立て帰途の目印とした。日の出直后に不帰最低鞍部に着く。天狗の大下り

から見る不帰Ⅱ峯の黒々とした岩肌は力に満ちあふれ、Ⅰ峯信州側の雪面のひだは、朝日を浴びて見事な明暗を作って居た。Ⅰ峯は稜線沿ひの夏道を簡単に辿り、ⅠⅡのコルでアンザイレン、2ピッチで針金の出て居る所に着き、之につかまり山形鋼製の橋を渡り、右へトラバース5米、氷のガリーを7米直登すると又、山形鋼製の橋があり、之をくぐりぬけて上りを左へ2米トラバース、夏道はここから信州側を巻いてⅡ峯C直下に出る我々は稜に沿ひ五米登りエボシ岩（Ⅱ峯A）基部に立った。此処に家田、細見が三月十七日唐松側から固定したザイルの端が雪に埋まって居た。エボシ岩はリッヂ通し及び黒部側がオーバーハング気味の岩が積み重なった様で手がつかぬ。信州側は上部を除きべったり雪をつけ、又、井上氏の所謂卵型雪の堆積である。信州側雪面のトラバースをしようとして一歩踏み出すと共に雪面にぽっかり孔があき5米下の孔から雪片が流れ出してはるか下方の南股へ落ちて行った。上面の雪と、岩に密着した

雪との間に隙間があるのだ、私は何時落ちるとも知れぬ大きな雪板の上に立って居たわけである。后退しピトンを打ったが硬いリスに十位入ったのを頼りに信州側の岩を登らうとしたが阻まれ、再び信州側雪面のトラバースにかかる。固定ザイルの一端をつかみ漸やくエボシ岩（Ⅱ峯A）のトラバースを終えキレットの底部に着いた時僅か十米程のトラバースに可成り疲労してゐた。此処から七米程の垂直に近い岩稜Ⅱ峯Bを登り、リッヂ沿ひに左方信州側の雪庇を避けつつ進むとⅡ峯Cの岩壁基部に至る。黒部側にわづかにトラバースして針金を見出し固く凍った雪面に所々顔を出してゐる針金を目印にステップを切りつつ十米程直登し、左上方に登って稜線に出るとⅡCはもう目前である。ピークより一米下のテラスに二人辛じてすわり風を避けつつ食事をとる。天候は一時間も前から険悪の相を加えてゐたが補助ザイルのみを持ち可成り強い南西風に叩かれ乍らⅢ峯A、B、C.は黒部側斜面を巻いて唐松岳頂上に至り引き返す。Ⅱ

峯尾根を登つた慈恵医大パーティにII峯Cで会ひ、エボシ岩の固定ザイル撤収に可成り手間どつた以外はスムースに往路を辿り、I、IIコルでザイルを解いた。天狗大下りを登り切つた頃から風雪となつたが、風にひるがへる旗を次々と目標にCIIIに帰着し、サポートの山本と成功を祝し合つた。山本は朝、アタックを送り出した后、天狗の大下りに至りアタック隊の行動を偵察した、

（川島　記）

CII隊十時半にCIIIに着き、山本からアタックがすでに不帰を乗り越えた事を聞き午后一時迄共に待つも帰投せず、天候変化に心を残し、CI隊と連絡のためCIIに下る。

CI隊早朝快晴に本日アタックの行はれた事を確信し、今迄散らかされたCIを整理后、東、安后は午后四時迄CIIでCII隊の連絡を待つ様指令されたが、二人の米以上の局所的天候変化に眩惑され帰途を案じ連絡を待たずに引き返した。家田は鐘北南山稜、杓子フェース等の登路をCIから望見中二時過ぎCII隊を杓子の肩に認め、帰つて来たCI隊に明日CII撤収予定の為、必ずCIIで待つ様云い残し、夕刻強風の中をCIIに登る。CIIに至り本日アタックが行われ、恐らく不帰も無事通過した事を知り約束通り午后七時足下に妥雲野の灯を見下しながらCIと電灯による信号を行ふも背后に吹々たる月を頂き、連絡とれずに終る。

三月廿一日晴后雪

CII（七、〇〇）——CIII（八、三〇）撤収（一〇、〇〇）——CII（一一、五〇—一二、三〇）——CI（一五、一五）

CI（八、四〇）——CII（一一、〇〇—一二、三〇）——CI（一五、一五）

CII隊が一刻も早く成果を知らうとノンストップでCIIIに駆け込むと連中は昨日のアタック成功に気を許し、ゆうゆうと朝食の最中であつた。

CIII停滞用食糧を腹一杯につめ込み、直ちに撤収作業に着手し、純白の雷鳥の群れ迷ふ稜線を心も軽く荷も軽く大人は悠々として帰途についた。鐘につく頃から天候は変りはじめCIIを見下す杓子頂上で雪が降り出して来た。CIIにCI隊二名を認め大声で成功を叫びCII撤収準備させる間、

CII CIII隊は二名づつアンザイレンし、次々とCIIに下つた。CIIから撤收せる荷を加え、一物も余さず再び八人が一隊となり、最后の固定ザイルもはづし、何回も通ひなれたトレースの登り用の足場も今はどんどん踏みつぶしを作ら大きなスライドでCIに着い時全員が心からの安堵で声もなくすわり込んだ。

四月一日 雪后晴

CI（二一〇〇）——デポ（二一四〇）——CI（二一五〇）——デポ（二三三〇）——BH（二五〇〇）——デポ（二六四〇）——BH（二七五〇）

風雪が舞い上つてゐるが最早天候も気にならぬ。

山本はアタツク完了を連絡に細野に下り、再びBHに上る事になり、他はCI撤收、中継行進によつて全荷を猿倉BHへ、夜十時山本は細野から上つて来た。

四月二日 雪

予定通り休養、喰つては寝、そ水でも雪からは粉雪の降りしきる猿倉の林間滑走を雪崩の音を聞きながら楽んだ。

四月三日 晴、

BH（八三〇）——細野（一七三〇）

昨日の雪もからりと晴れ、朝、小屋の前の樹林を縫ふ日差しを体一杯に受け、小鳥の囀りを聞き作らひしひしと麓の春の感触に身をゆだね、やがては雪まみれ汗まみれのころげつ、まろびつの行進がはじまる。田島川島、安ロは軽装で細野へそりを取りに帰り、他は沼池平に荷の中継を行ひ、細野から来たそりに乗んどの荷をのせ八名一隊となり、細野に下り、全行程を終了した。

四月四日 晴、

午后四谷発帰阪

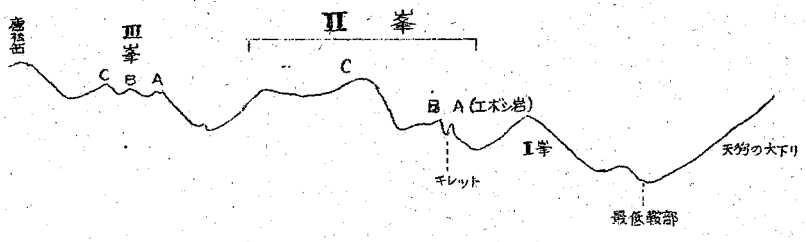
（家田記）

行動表

3月/日	天候	細野	二股	B・H	(二〇〇〇)	CⅠ	與子双頭	(二〇〇〇)	CⅡ	杓子	(二七五〇)	CⅢ	唐松岳
19	曇后雨	5.											
20	小雪	5.											
21	晴			5.									
22	晴	4.		3. / 2.									
23	雪	1.		1. / 2. / 2.		停 T							
24	晴后雪			5.		3.							
25	吹雪					停 8.							
26	晴					2. / 6.							
27	晴后雪					3.							
28	曇后晴					6. / 2.							
29	曇		2.			1.			3. / 2.				
30	晴后曇					2. / 1.			2.			停 1. / 2.	
31	晴后雪					2.			3. / 3.				
4月 1	雪后晴			1. / 7.									
2	雪			停 8.									
3	晴	3. / 5.											

不帰連峰概念図－信州側より

川島　勇



予定行動表（改案）

日	細野	B・H 猿倉	C I	C II	C III 唐松
1	← 5.				
2	5. →				
3		← 5.			
4	3. →	2. → / ← 3.			
5		3. → / 3. →	← 2.	← 1.	
6			3. → / ← 3. / ← 3.		
7			← 2.	← 3. / 3. →	
8			← 2.	← 2. / ← 1.	← 2. / ← 1.
9			← 3. / ← 3. / ← 2.	3.	
10		← 8.			
11	← 8.				

個人行動表

3月 日 / 天候 / 名	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	1	2	3	4
	曇后雨	小雪	晴	晴	雪	晴后雪	吹雪	晴	晴后雪	曇后晴	曇	晴后曇	晴后雪	雪后晴	雪	晴	晴
家田	H. ← 二	H. → B.	B. ← C1	B → C1	停	C1 ← O	停	C1 ← S	C1 ← O	C1 → C2	C2 → C1 C3	C1 → C2	C2 ← C1 C3	B ← C1	停	H. ← B.	
尾藤				H → B	B → C1	〃	〃	C1 ← C2	〃	〃	C2 → C3	C3. ← K	C1 ← C3	〃	〃	〃	
田島				〃	B ← C1	B → C1	〃	〃	〃	〃	C2 ← C3	C2 ← C3	C2 ← C1 C3	〃	〃	〃	
川島				〃	〃	〃	〃	C1 ← S	〃	〃	C2 → C3	C3 ← K	C1 ← C3	〃	〃	〃	
坪井	H. ← 二	H. → B.	B. ← C1	B. → C1	B ← C1	〃	〃	C1 ← C2	〃	〃	C2 ← C3	C2 ← C3	C2 ← C1 C3	〃	〃	〃	
山本	〃	〃	〃	B ← C1	B ← C1	〃	〃	〃	〃	〃	C2 → C3	C3 ← 天狗	C1 ← C3	H → B	〃	〃	
東				H. → B.	〃	〃	〃	〃	〃	C1 ← C2	C1 → H.	C1 ← C2	C1 ← C2	B. ← C1	〃	〃	
宍戸	H ← 二	H. → B.	B. ← C1	B. ← C1	B. → C1	C1 ← O	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
久保	〃	〃	〃	B. → C1	H. ← C1												

H: 細野　　D: 與双子頭　　二: 二股

B: 浪倉B.H.　　K: 唐松岳　　S: 狗子岳

(三) 食糧報告

一、主食

(ω) 計画、食糧計画は行動計画と常に表裏一体で行動による限られた運搬能力と密接に関連し、而も如何なる時期に於ても最悪の状態（悪天候が続く場合）に置っても常に食糧的に余力があり、更にその後の計画を遂行せしめ得る食糧（量的質的に）計画と言った弾力性を、持たさねばならない所に計画の焦点があった。かく食糧計画は行動計画と不可分関係にあるので簡単に、食糧面から見た行動計画から記そう。

先づ全期間を、A（攻撃態勢確立）B（攻撃―四日）C（撤収）と三分す。食糧一人一日約四〇〇〇〇メとして、最初CⅢから装備、食糧の全重量を出し、次に、それをCⅡから運ぶに要する延人数をCⅡに配置する為のCⅡの食糧が算出され之に攻撃予定日、撤収、及び停滞食を加へる事によりCⅡの全食糧が算出されてくる。かく同様にCⅠについて、又BHについて行ふ事により予定の荷物を完全に運搬し得る行動表が作られた。この行動表を元とし、各行動日に対応して夫々一日の停滞食を付け、各テント別に行動食停滞食数を算出、次に述べる単位を用ひて、その食糧を計算した。

A（態勢確立7日）	B（攻撃4日）	C（撤収）
行動食 7日	4日	2日 計 13日
停滞食 7日		2日 計 9日

主食単位（行動食）、停滞食は晝食のみ抜く、

一人一食 朝……餅 2合

〃 晝……乾パン一袋（50ヶ）又は揚パン2ヶ（50ヶ）

〃 夜……米2合又は食パン½ヶ

これより各天幕、及び總量は

	CⅢ	CⅡ	CⅠ	BH	
米	―	四・二升	一五・四升	二〇升	三九升
餅	四・二升	六・二升	一九・六升	―	三〇升
食パン	七・五ヶ	五ヶ	一六ヶ	―	二八五ヶ
揚パン	二〇ヶ	一〇ヶ	―	―	五四ヶ
乾パン	一五袋	一五袋	四五袋	―	七五袋

となり各天幕に食糧表を置き、責任者が毎日の

消費量、更に現有量（何れも主食）を記入し爾後の食糧移動に備へたのである。

(b)報告、食糧数、配置、何れも計画通り行つた。全計画が早期に終つたので主食は余り、緊急の食糧移動に備へた食糧表は本来の役目を果さなかつたが主食の消費状態、消費量、が分り、更に全員に、常に食糧数に対する関心を高めた点は大いに多とすべきである。又消費単位数は、

朝　（餅一合）＋（パン½斤）、

晝　（乾パン½袋）＋（揚パン半ケ）、

夜　米2合、又は餅2合

となり、これから明らかな様に、朝食の餅パンの併食は良好、晝食についてはもつと適当な物が考へられねばならず、夜の米、餅は夫々一食2合消費してゐた。又主食が幾種にも分れてゐた事は副食の献立数と共に、長期間生活に対して欠くべからざる物と思ふ。

最後に反省として、こういう計画自体は全計画が更に大きくなつた時即ちテント一個増すだけでその侭にこの計画法を伸して行く事が出来ないであらうと思ふ。即ち極地法は、規模の大さにより、異る筈である。

二、副　食

計画が早期に終了した爲主食は多く残したが、副食は殆んど残らなかつた。これは当初の計画に大きな誤りのあつた事を示してゐる。従つて初め副食量決定の基準とした一食毎の副食量は、ここに述べても無益であると思はるので、此処には全体の副食消費量より逆算した一食当ての副食量の中、比較的重要なもので、かなり数量の決定に確実性あるものを撰んで挙げ、以後の食糧計画の参考に資せんとした。

玉ねぎ	二八匁	スープ	一、七箇
馬鈴薯	七匁	味噌	一二匁
牛肉	一二匁	醤油	〇、五匁
白菜	六匁	塩	〇、一匁
小麦粉	七匁	カレー粉	大一箱三〇食

右の表の中、塩、醤油に就いてはまだまだ研究の余地がある。又、スープが一食一、七箇になつたの

は、スープを単独で用ひる外に、カレーその他の調味料としてかなり用ひられた故である。この外バター、粉ミルク、乾ブドウ等があるが、何れも少量で、食用が短期間の為一食当ての数量として到底正確を期し難いので除いた。

此の表は云ふまでもなく完全なものではなく、一応の試みに過ぎないので今後の研究により更に完全なものとすべく努力をして行きたいと思ふ。大方の諸兄の御援助を切にお願ひしたい。

尚最後に簡単に副食總量を記す、各テントへの配分は、全て主食に従属せしめたので省略す。

野菜	九貫	醤油	一升
肉	二、五貫	味噌	一貫
乾ブドー	一二箱	ジャム	二、五lb.
粉ミルク	二lb.	チーズ	〇、五lb.
バター	二lb.	佃煮	三〇〇〆
スープ素	一一四個	カレー粉(天)	三箱
砂糖	八斤	小麦粉	一貫
夏みかん	一、五貫		

（尾藤、山本記）

（四）装備、

食料と同じく装備も行動計画に応じて立てられ、全装備を三分し、C_1、C_2、C_3用に夫々黒、青、赤に色別けした、荷札を附けて分類したが、攻撃態勢完成迄は有機的に移動させながら、使用したものが多かった。例えば、シャベルはC_1完成の后、C_2建設には三本全部使用し、完成するや一本C_1に下し、次にC_3設営にはC_2よりの二本で作業して出来上ると一本をC_2に下したから、二、乃至三本のシャベルで各キャンプを作りつつ、一方各キャンプには常に一本のシャベルがあったわけである。従って表示した共同装備は攻撃態勢が整った際の配置である。

ガソリンは当初一人一日〇、八合の割で行動日数の二倍十四日八人として計算し、一斗用意したが、実際には一人一日一、二乃至一、四合使用したため約九日間で殆んど使い尽くし、危く燃料不足に陥いる所であった。

連絡並に風雪中の目印用に持って行った黄〜赤

迄の種々の色の旗の中、明かるい赤が風雪中では最適であつた。形は細長い短形（十糎×二十糎）が稜線では適当である。之に対する旗竿としては、十糎至位の雌竹を長さ一米に切つたものがよく、十糎以上雪の中に入れは倒れることはなかつた。

（川島記）

C_3用ザイル二本の中一本はナイロンザイルであるが之については後に詳述した。

共同装備表

品名	C_1	C_2	C_3	計	備考
テント	1	1	1	3張	（4人用）
ポール		2	4	6本	C_1及びC_2の不足分は五輝を切って用いた。
竹ペグ		8	12	20本	
グランシー	6	4	2	12枚	
スコップ	1	1	1	3本	
ノコ		1	1	2	他にB.H.に各々1。
ナタ			1	1	
ロープ	18	14	12	44本	25本使用、他にB.H.に6本。
ラヂウス	2	1	2	5	1台故障のため使用せず。
コッフエル	1	1	1	3	
ハンゴー	3	1	1	5	
ガソリン	6.6ℓ (7.2)	2.1ℓ (1.5)	1.3ℓ (0.8)	10ℓ (9.5)	（ ）内は使用量。
ザイル	1	2	2	5本	C_1の1はC_1C_2間FIX.他に不帰セルットFIX1本
アイスバイル	アタック用			1	
カラビナ				5	
ピトン				4	1本使用
アイスハーケン				2	
テルモス				1	
ツエルト				1	
重量	9貫	9貫	11貫	21貫	

（五）會計

収入、

隊員負担　三三、二四〇円（四、一五五円×八人）

寄附　三、〇〇〇

計、　三六、二四〇円

支出、

食料　一八、六〇〇円（主食、副食比一〇：八）

装備　二、八〇〇（ガソリン八〇〇円、その他テント修理等）

宿泊　五、三〇〇（一泊二五〇円）

人夫　一、一〇〇（網野→猿倉三〇～四〇円賃）

医薬　八四〇

交通　七、二四〇（大阪↔四谷八八〇円×八）

其の他　三六〇

計　三六、二四〇円

其の他旧人費用を別にして一人平約四、五三〇円の消費であった。

（尾藤記）

（六）気象

気象の方より今度のポーラーを眺めると第一に前半晴以外は動かず、後半くづれんとする天候に先んじてアタツク迄持って行き、成功と見るやすぐ撤収すると云ふ非常に天気をうまく利用したとも云へるのである。三、三〇に動いて居らなかつたら結果より見て後線に四、五日閉じ込められたと思はれる

さて三、一九より四、三に到る行動期間中の天候を簡単に分析すると、十六日間を通じて、晴天四日、雲五日、雪四日、晴のち雪二日、雨一日となつてゐる。この中晴天はCII迄であり、後線では全部雲又はガスである。

この期間中本邦附近に発生せる低気圧は九ケであり、一九日の雨、二三日の吹雪は各々九九二、九九六ミリバールの優勢なるものであった。概して低気圧通過後の西高東低の冬型配置における降雪が大風雪となつてゐる。例へば三、二五、四、二。

アタックの日は午后寒冷前線が通過してゐる。
撤收の日朝一時晴れ間を見せてゐたのは（低気圧は四国）低気圧の前面に於ける一時的なる晴天と考へられ非常に注意しなければならない、
この事からも携帯ラヂオの必要を痛感する。気温、気圧、湿度、風向等のデータのないため外面的説明しか出来ないのは残念である

（坪井記）

新しい装備の試み

△ベニヤ板マットの補足

前号の記事で少し書き足らなかつた点を加えると、我々はベニヤ板が従来のものより全ゆる点で優れてゐるから取り上げたのでは無く、全く限られた予算の中で高価なマットを新調する位なら、我々の場合ヘヤーロックを二枚位新調すると一年の学校よりの予算は全部無くなる程の貧弱さである。僅か百円位で出来て案外耐久性のあるベニヤ板ですませて他の必需品に予算を廻した方が賢明であるといつた意味の工夫である。今冬の結果をつけ加えると、苦労してやつて頂いた塩化ヴニール塗布のものよりも普通のペンキ（油性）を少し厚目に塗つたものの方が防水性は良かつた様である。未だ試みてはゐないが尿素樹脂又は石炭酸樹脂を接着剤としたベニヤ板は主に輸出用に使用されてゐる様であるが當然耐濕性は従来品より遙かに勝つてゐる筈である。

（大島記）

△無連結気泡スポンヂマット

大変長々しい名稱であるが中村英碩氏（浪高京大O.B）が御教示下さつたものである。従来のスポンヂゴムは気泡が連結してゐたが最近気泡が一つ一つ独立して無連結のものが出来る様になつたので、水は吸わないしおさえても凹まなく断熱性も良好との事である。一度マットとして使つてみる価値はあると思うが、値段が普通のマット同様一人分二千円余

りするらしいので今の所手が出兼ねてゐる。

（大　島　記）

△　珪素樹脂防水

塩化ヴニールによるヤツケの防水は昨春試用して失敗した事は後記の通りであるが、可塑剤等の改良により耐寒性は相当改善される見込で、あるから全く棄てさるべきのものでも無いかも知れない。然し最近非常に注目されてゐるSi系樹脂を衣類に浸透させると防水は良く而も或る程度内部の空氣が流通し耐寒性も優秀との話をきいた。京大のヒマラヤ用テントに用いられるとの噂もあるし、我々も今夏迄に試みたいと思つてゐる。但し珪素樹脂は日本では未だ一般には簡単に手に入らぬかも知れ無いが「日本珪素樹脂K、K」等の会社で生産を始めてゐるから来年位には常用されると思う。（大　島　記）

△　塩化ヴィニールヤツケ

昨春、石立山逆縦走を試みた際、美津濃技術研究部の新保先輩の御好意によつて、塩化ヴィニール製ヤツケ①と、羽二重に塩化ヴィニールを塗布したもの②を試用する機会を得た。結論を先に云うと、①は防水防風共完全であつたが、岩角ブツシユにひつかゝつて簡単に裂け、②の方は風、雨共に全く効果がなかつた。

塩化ヴィニール自体は耐水性良好なもので又、摩耗にも強いが引裂きに弱いため、このままでは①の如く実用的でない。厚い綿布に塩化ヴィニールを塗つたものはすぐれた防水布となり、アメリカなどではトラックカバーとして用いられ五年位の耐久性を示すものがあるそうである。しかし之では衣類としては硬すぎて使いものにならぬ所から②の様なものが試作されたわけである。所が芯になる布がやわらがいと、シワがよつて塩化ヴィニールの樹脂膜にひびが入り、ここから水が洩る。山での衣類は手荒い取扱いを受けるのが普通である

から少くとも山用衣料としては不適である。
耐寒性の問題については、試用したものは悪く、稜線ではゴワゴワして破れやすくなつたが、之は可塑剤の問題もあつて改良の余地はある。しかし、引裂に弱いと云う欠点のために山用衣類としての塩化ヴィニールには將来性がないものと思われる。

（川島　記）

△ナイロンザイル

従来積雪季登山の際、不愉快な事の一つにザイルに雪がつき凍ると云う問題があつた。之は、ワセリン、スピンドル油を十分塗込むことによつて或る程度迄防げるけれども完全とは云えないものであつた。今春、小日向より不帰往復に際し、美津濃の天正先輩の御好意によつて試用したナイロンザイルはこの欠点を完全に無くしてくれた。私達が用いたものは登山用として作つたものではなかつたので、経十四粍、長さ四十米で、重さが一貫五百もあつた。従つてこのザイルについては①太い、従つて風圧が大で稜線ではザイルが振られることにより登攀者はバランスを失いやすい。②重い、従つてトップは登攀中常に下後方にひかれる。③よりがゆるく従つて非常にもつれやすい。と云う欠点があつた。しかし、雪がつかず手ざわりがなめらかで氣持よく使えるし、又、ナイロン自体の性質から云うと麻に比して引張強度は五乃至八倍、毫粍強度三乃至五倍比重0.九倍と云うすぐれた利点を持つている。耐寒性は麻に劣ると思われるが－20°位では何等変化なく、この程度なら実用上差支えはない。

今一例としてマニラ麻ザイル十一粍径、二十米長、二瓩重、引張強度一一八五瓩をとり之と同じ強さのナイロンザイルを考えると、四～五粍径、0.四瓩重のもので十分であり、之は又風圧によるバランスの喪失を半分以下にする。実用上八粍経、四十米長のものを用いるとすれば、引張強度は三、五瓩（三倍）、重さは二瓩という、従来のザイルの歓念とは大

分離れたものが出来る。この様なザイルの出現は一寸した山行でもザイルの携行を容易にし、従来よくあつたザイルを持つていたら起らなかつた様な遭難を少くすると共に本格的な登山に於ては重量の軽減はそれだけ攻撃力の増大になるわけである。

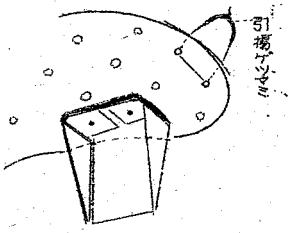
ナイロン又は之と同種の繊維、例えばアミランはテント其他にも応用の面広く、その将来を期待する次第である。

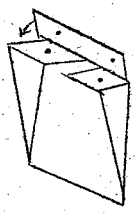
（川島記）

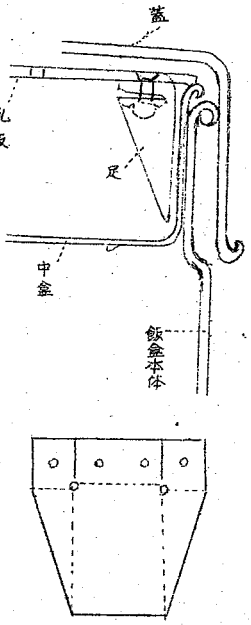
△蒸器

蒸器と言つても特別な装備では無くて、家田の提案により、飯盒を蒸器に使へる様に作つた所の、多数孔を開けた中底の事である。これは私はまだ見た事がないがすでに市販品の中にもある様であり、それは中盒の底へ孔をあけた様なのを逆に入れて居るらしいが、絞り加工設備を持たない私は単なる曲げ加工のみで作つて見た。図の様に0.八粍の厚さのアルミ板を飯盒の

内側へ丁度はまる形に切り（飯盒は大きさがまちまちだから多数作る時はそれぞれあはせて作る事）孔は四粍直径の物を十五粍間隔であけた。







別に右図の様な形の物を同様の板から切り抜き、点線の所から曲げ右図の如く鉄で取りつけ

足とする。足の高さは中盗の深さよりやや短い目にし、孔板の縁より少し内側に取りつけておけば、飯、副食の入って居る時でも、中盗の中へ入れて飯盗もろとも持ちあるけるから、便利である。（図参照）足を別に作らず孔板の縁に凸出部を残し、折り曲げて作る事も考へられるが、アルミの様な繰返し曲げに弱い材料では、山での荒い取扱いに折れやすいだらうと思ふ。孔板の一端にニュームの針金でつまみを取付けておくと、使用後引揚げるのに便利である。

使用して見た結果は、パンは水気を含みすぎてよくないが、飯は前夜のでも出来たて同様暖かくして食べる事が出来る。餅に対しては特に有効であって、最初試みた時などすっかりとろかしてしまった程、早くやはらかくし得る。底へ入れる水量がわずかですむから、燃量が非常に経済であり、かつ供給速度が早いから多人数にもよい。少し手細工の出来る人なら作れる簡単なものであるし、費用や重量等は問題にならないから、各Cに一つづつ持てば、燃料の節約にもなり、時間的にも有利だと思ふ。

（久保記）

山行記録

一九五一・九～一九五二・六

道場　九月十五・六日　川島

北岳バットレス

九月廿一日　大阪発

〃　廿二日（曇）日野春下車。一一、三〇　大菱鉱泉出発、赤薙岩小舎、一二、三〇――一四、〇〇出発。尾無尾根末端一六、〇〇。広河原峠　一八、二〇――一九、〇〇出発。

二二、三〇　広河原小舎

〃　廿三日（晴）一〇、三〇　広河原小舎出発、一四、三〇。大樺池着、晝食、一六、〇〇出発、一七、三〇。大樺沢左股岩小舎。

〃　廿四日（晴）（以後、時間はサンマータイム）

徳永、細見第一尾根支稜登攀、

八、〇〇出発、九、〇〇バットレス沢、一一、〇〇
第一尾根支稜、一三、〇〇北岳頂上
住吉、尾藤第五尾根登攀、八、〇〇出発。
九、二〇dルンゼから取付く。一二、五〇北岳頂
上、四名一緒に一四、〇〇下降、一七、三〇岩小
舎着。
九月廿五日（雨）　停　滞、
〃　廿六日（小雨後雨、夜半雪）　四名で九、〇〇
岩小舎出発、九、四〇dかゞり、一四、三〇引返す、
一七、二〇岩小舎、直ちに広河原への退却。途中
草滑直前の森林帯で日がくれビバーク、
〃　廿七日（晴）休養、大樺泊。
〃　廿八日（晴）徳永、細見パーティ、第二尾
根新ルート登攀、（本文参照）九、三〇大樺発、
一〇、〇五岩小舎、一〇、四〇出発、一七、五五北岳頂上
一九、〇〇岩小舎、尾藤、住吉パーティは東北尾
根登攀、岩小舎までは同様。一〇、四〇岩小舎出発
大樺沢右股から取付く。北岳頂上一四、三〇。
一六、三〇岩小舎、
廿九日（晴後曇夜小雨）撤収。九、〇〇出発、

九、四五、大樺——朝食——一二、〇〇出発。一三、〇〇広河原小舎、
一四、〇〇出発。一五、四〇広河原峠。一八、〇〇青薙滝下。
真暗で道分らずビバーク。
廿日（晴）八、三〇ビバーク地点出発、一〇、〇〇大薮鉱
泉。一一、三〇駒城。甲府より帰阪。
大杉谷、大台ケ原、十月十日～十四日　川島、近、
上市——大台辻——桃ノ木——嘉茂助谷——大台ケ原
——上市
穂高　岳　二木、坪井、宮本、
十月十二日（晴）松本——上高地——涸沢新小屋。
〃　十三日（晴）小屋（一一、二〇）——北穂（一三、四〇
——一四、四〇）——穂高小屋（一六、四五）——涸沢小屋。
〃　十四日（雨）沈　殺。
〃　十五日（風、雨）徳沢迄下る。
〃　十六日（晴）徳本峠を越え下山。
北岳荷上げ並に偵察、久保、近、川島、
十月廿一日（晴）韮崎着（七、〇〇）。大薮鉱泉泊。
十一月　一日（晴）山ノ神沢飯場（九、〇〇——一二、〇〇）で
人夫四人（各、文貢）と合す。——赤薙沢——尾
無岩小屋（一六、〇〇）

十一月二日（雨）停滞。

〃　三日（晴）岩小屋（六、〇〇）――広河原小屋（一一、〇〇）峠（九、〇〇）――

十二時、人夫を帰す。

（一四、〇〇）小屋――大樺小屋（一七、〇〇）積雪十糎。

〃　四日（晴）川島、久保、第一尾根支稜登攀。（六、四〇）発――バットレス沢（九、〇〇）――aガリー（一〇、三〇）――第一尾根支稜（一二、三〇）――北岳頂上（一六、四〇）――草ズリ――大樺小屋（一八、三五）近、草ズりより北岳往復。

〃　五日（晴）川島、近、バットレス、トラバースバンド偵察、（七、五五）発――バットレス沢（九、四五）――トラバースバンド（一一、〇〇）――第二尾根末端（一三、〇〇）引返し――大樺沢二股（一四、三〇）

久保、八本歯沢をつめ、最低鞍部（一二、二〇）より引返す。二股で三人合し、

大樺小屋（一六、〇〇）――広河原小屋（一七、三〇）

〃　六日（晴）荷上げ、物資整理。

（一〇、〇〇）広河原発――広河原峠（一二、三〇）――横手（一八、五〇）。日野春より帰阪。

比良縦走　十一月一日――三日　尾藤、辻川、北川、

比良――望武小屋――金桜峠――葛川峠――木戸、

道場　十一月五日

細見、平井、山本、林、東、大村、安戸、

阿蘇山　十一月十九～廿日　久保、

初冬の穂高　尾藤、外一名、

十一月廿三日（曇後雨）松本――上高地（一五、三〇）

バスは沢渡まで。

〃　廿四日（晴）上高地――横尾小屋（一五、〇〇）

〃　廿五日（晴）横尾（六、〇〇）――涸沢（一〇、〇〇）

――直登ルンゼ（一二、〇〇）――奥穂頂上（一四、三〇）

――穂高小屋――涸沢小屋。

〃　廿六日（風雪）涸沢――横尾小屋。

所要時間四時間半。降雪量一尺余。

〃　廿七日（風雪）横尾――上高地（一五、三〇）

〃　廿八日（雪）上高地――中ノ湯。

ラッセルひどく純所要時間八時間半。

〃　廿九日（小雪）中ノ湯（一〇、三〇）――奈川渡（一九、〇〇）（スキー使用）

十一月廿日（晴）松本より帰阪。
六甲保星岩　十二月九日
　徳永、久保、宮本、由比浜、川島、
冬山北岳合宿、
　細見、住吉、川島、田島、由比浜、
十二月廿五日　溪町発（一九、五〇）
〃　廿六日（雨）韮崎着（七、〇〇）――
　駒ケ岳　林道　飯場（一六、三五）。
　廿七日（晴）飯場（六、〇〇）――赤薙沢
　――尾無尾根　二二〇〇米（一八、〇〇）
　フォースト・キャンプ。
〃　廿八日（晴）（一〇、〇〇）発――広河原峠（一一、三〇）――広河原小屋（一四、三〇）
〃　廿九日（晴）荷上のため大薙小屋往復（九、〇〇～一六、〇〇）
〃　卅日（晴）（一一、〇〇）発――大薙小屋（一三、四〇）C1設営、
　御池は草ズリよりの大デブリに埋没。
〃　卅一日（雨）停滞。

（四二）

一月一日（晴）物干。
一月二日（晴）C1（五、〇〇）――小太郎尾根（七、〇〇）
――北岳（九、〇〇）――中岳との鞍部（一〇、三〇）。C2設営。アタック細見、住吉に入る。
サポート川島、田島、由比浜、C2発（一二、〇〇）
――八本歯沢――C1（一五、三〇）撤収――広河原小屋（一九、〇〇）
一月三日（雪、後曇）アタック、中岳往復（一四、〇〇―一六、〇〇）。
夜に入ってC2風の為破損。
一月四日（晴）アタック、間ノ岳手前迄往復（八、三〇～一〇、三〇）。後C2放棄。
北岳頂上（一二、三〇）――草ズリ――広河原小屋。
サポートは、（七、一〇）発――広河原峠（一一、〇〇）
由比浜、田島、ここより下山。
川島、早川尾根を凰凰に向う。
（一七、三〇）凰凰サイの河原でビバーク。
一月五日（晴）川島、観音岳往復（一〇、〇〇～一二、二〇）――白鳳峠（一六、〇〇）――広河原小屋（一七、四〇）
アタックは広河原小屋停滞。田島、由比浜は旗手上り帰阪。

一月六日（雪）停滞。
一月七日（雪）小屋発（七、三〇）――広河原峠（一一、三〇）
赤薙沢ビバーク（一七、〇〇）
一月八日（曇）（八、三〇）発――横手（一四、二〇）
韮崎より帰阪。

八方尾根合宿
十二月廿四日（曇）先発隊として大村、近、東、安戸、北川、辻川、佐谷、柴田大阪発。
十二月廿五日（曇）先発隊細野着、四宮、を加へ午后黒菱小屋に入り、四宮は細野へ帰る。大久保先輩、山本大阪発。
十二月廿六日（雨）先発隊終日スキー練習。大久保先輩、山本、細野着、雨の為停滞。
十二月廿七日（風雪）大久保、先輩、山本、四宮、黒菱へ正午着、先発隊と共に上の段に五人用天幕設営、大久保先輩、四宮、山本、大村、近、残り、他は黒菱へ下る。篠田先生、久保、宮本、細野より黒菱へ。
十二月廿八日（雪）篠田先生、大久保先輩、山本、大村、の四名第二ケルン附近迄、他は第一ケルン迄往復後、篠田先生、大久保先輩、大村、近、宮本は天幕に残り、他は黒菱へ下る。
十二月廿九日（風雪）全員で上の段附近に雪洞を掘削せんとしたが、積雪量少く失敗。午后篠田先生、大久保先輩、久保、四宮、佐谷、北川、柴田細野へ下る。他はイグルーを試築せんとして失敗、大村、宮本黒菱へ下り、他は天幕に泊る。大島細野着。
十二月卅日（快晴）山本、大村、近、宮本にて唐松へ、朝濃霧に眩惑されて天候を誤認し出発大いに遅れる。出発（九、一〇）――下の樺スキーデポ（一一、三〇）――国境稜線（一四、三〇）――スキーデポ（一六、〇〇）――テント帰着（一七、〇〇）
大島は第三ケルン附近で下山し来る前記四名と会ふ、他は第三ケルン迄往復後スキー練習。前記四名に安戸の五名の他、黒菱へ下る。
十二月卅一日（雨）大村、安戸、東、辻川細野へ下る。大島、山本、近、宮本天幕に停滞。
一月一日（曇）上の段天幕撤収、夜に入り細野に下山

伊吹山スキー　尾藤、細見、由比浜、東、
一月十九日ー一月廿日
大山スキー行　一月十三日ー十五日　久保、
御在所岳スキー　尾藤、由比浜、東、安戸、
二月廿三日ー廿五日　北谷より頂上往復。
積雪二尺
伊吹山スキー　二月十日　大久保、久保、
春山　小日向より不帰往復（本文参照）
三月十八日（曇）本隊細野着　荷物の整理。
三月十九日（曇后雨）二股迄荷揚げ。
三月廿日（小雪）ー猿倉（BH）へ荷揚げ。
三月廿一日（晴）C1（小日向双子岩）予定地に荷揚げ。後発隊大阪出発。
三月廿二日（晴）C1、設営。後発隊、猿倉に入る。
三月廿三日（雪）C1、荷揚げ、
三月廿四日（晴後雪）C1、荷揚げ、及び奥双子偵察。全員C1に集結。

三月廿五日（吹雪）全員停滞、
三月廿六日（快晴）C2（双子、双子尾根ジャンクション）荷揚げ。
三月廿七日（晴後雪）C2、荷揚げ。
三月廿八日（晴）C2　設営。
三月廿九日（曇）C3（天狗の泊場）設営。
三月廿日（晴後ガス）アタック二名唐松往復に成功。
三月廿一日（晴後雪）C3及びC2撤収。
四月一日（雪後晴）C1撤収。
四月二日（雪）休養。
四月三日（晴）B、H撤収細野に下る。
四月四日（晴）帰阪。

新人歓迎キャンプ
五月十七日、十八日　於道場。
篠田先生、家田、川島、坪井、東、塚谷、林、安戸、宮本、山本（新人）木村、鷲沢、李中、
仁川岩登り　五月廿四日　田島、山本、井上、

穂高行　　尾藤他一名

五月廿一日　大阪発、

文月一日（曇）上高地着、霞沢岳頂上直下迄往復。

文月二日（雨后曇）前日と同様の処迄往復。

文月三日（晴后曇）出発（五、三〇）――奥沢出合（一〇、〇〇）――奥穂南壁――穂高小屋（一六、〇〇）。

文月四日（晴后雨）奥穂――ロバの耳（八、三〇）――天狗のコル（一〇、二〇）――天狗沢――河童橋（一二、四〇）――中の湯。

文月五日（晴）中の湯――島々　帰阪。

集會記録

（一九五一・一〇～一九五二・六）

一〇月一九日　○秋山報告

一〇月二六日　○冬山計画討議

一一月二日　○冬山計画討議

一一月九日　○広河原小屋への荷揚げ及び北岳バットレス偵察の報告（久保、川島）

○北岳入山法（入負配置面より見て）提案（細見）

○黒菱合宿計画提出（山本）

一一月一六日

○南アルプス方面の積雪状況を一九二九年立教の地蔵岳登攀に例をとりて説明（尾藤）

一一月二三日（風雨）○總会　摩耶山天王寺にて行わる。出席者――篠田先生、赤尾先輩、大久保先輩、徳永先輩、大島、加藤、家田、細見、川島、住吉、由比浜、田島、山本、宮本、佐野、辻川、近、林、

一一月三〇日

○黒菱合宿討議

一二月七日

○北岳計画発表（細見）

細見、尾藤、住吉、川島による案、バットレス登攀及び農島往復。

一二月一四日

○尾藤の北岳参加不能により、北岳計画変更

を討議、由比浜、田島、北岳参加に決す。

。黒菱合宿最終決定

一二月一八日（火）○黒菱パーティ、臨時集会。

一二月二一日○北岳計画変更討議

一二月二二日（土）○黒菱合宿食糧購入。

一二月二四日（月）○黒菱合宿隊出発

○北岳計画変更につき、討議

(1)後立山不帰峡往復に変更案、(2)縮少せる計画による北岳バットレスのみの登攀(3)農鳥往復の三案を討議、(1)は否決、(2)(3)の何れかを参加者自身の討議により選択する事に決す。

一二月二五日（火）○北岳パーティ出発

一月一一日○冬山報告

一月一七日（木）○リーダー会、

春山計画、冬山批判、金旺集会方法討議、

一月一八日（金）○冬山批判会

○集会方針決定

一月二五日○極地法を中心として視た、戦前・戦後に於ける、諸学校山岳会の動きについて、（大島）

二月一日○極地法（尾藤）

二月八日○春山計画、家田案検討

二月一五日○春山計画

二月二二日○春山計画

二月二九日○後立全縦走について（家田）

三月七日○不帰険について（家田）

四月二日○春山報告（家田、川島）

五月九日○春山、食糧、会計、報告（尾藤）

五月一五日○リーダー会　於記念館

○本年度の山行方針決定、　於ルーム

○テント会費、庶務係決定、

五月二七日○新年度の詞（篠田先生）

○鳥海山報告（〃）

五月二三日　於朝日新聞社本社、講堂、

日本山岳会関西支部総会　○訪問田氏の「ヒマラヤについて」の講演を聞く、

五月三〇日○今冬の各大学山岳部報告の紹介（尾藤

○東京各大学山岳部の春山、早稲田、京大、福岡の遠征計画その後のニュース（篠田先生）

○凍傷について（家田）

○図書紹介　　（大島）

"Climbing in Britain"
J.E.Q. Barford, Alican Boole.

○穂高、岳川行計画発表　（尾藤）

六月六日　於ルーム、

日本山岳会と関西学生山岳連盟の懇談会に出席

○春山報告、夏山計画発表

○岸田氏の「白馬」より親不知へ（五月）」を聞く

六月十三日　○地図の読み方　（近）

○穂高報告　（尾藤）

六月二十日　○天気図の読み方　（坪井）

（林　記）

編集後記

○ この号では秋山の幸運な成功と、冬山の惨めな失敗と春の当然得られた成功の記録を載せた。紙面の都合から冬山の分は本文から除いたが、山行記録及び集会記録によって、行動の概要は分ると思う。

○ 春山報告は我々が始めて行った完全な形のポーラーであるから、単なる経過報告に止めず、食料其の他についても出来るだけ詳しい報告を載せ、今后の計画の参考になる様にした。

○又、私達が、理科系学生が主になっている山岳部であるということをほんのわずかばかりでも示すべく、新しい装備について若干の紙面をさいた。

昭和廿七年六月廿五日　印刷発行
大阪大学山岳会「時報」第四号
発行所　大阪市北区堂ビル前砂銀ビル三階　大阪大学山岳会
編集責任者　大阪大学山岳会　川島勇
印刷所　大阪市西区江戸堀北通二丁目一七　美研社
電話土佐堀五〇〇八番

現役部員名簿（昭和四七年六月現在）

医学部	家田千尋	4	大阪府豊能郡箕面町桜井4－2
	住吉仙世	3	西宮市羽衣町97（西宮316）
	尾藤昭二	2	大阪府泉北郡信太村聖ヶ岡
	川沢逞夫	2	芦屋市三條町76（芦屋4547）
	東　雄	2	大阪市阿倍野区阪南町中6－16
	坪井圭之助	1	布施市稲田1614（呼出稲田119）
	林伸一	1	神戸市灘区森後町1－2（呼出御影6317）
	北川常広	新3（業学）	神戸市垂水区西垂水町1052
歯学部	柴田昌三	3	西宮市鳴尾町上甲子園43
理学部	細見一仁	新4（生物）	大阪市福島区上福島南2－54（福島6408）
	堺谷弘	〃（化学）	大阪市西成区玉出本通1－10
	大村一生	新3（物理）	豊中市岡町南5－32（豊中3090）
	浅井力	〃（数学）	神戸市須磨区天神町2－18
工学部	四宮誠祐	新4（造船）	大阪市阿倍野区相生通3－15（天下茶屋2956）
	二木節夫	〃（通信）	尼崎市潮江撫然寺15
	川島勇	新3（機械）	神戸市長田区西丸山町2－14（呼出湊川1481）
	宮本貞雄	〃（通信）	尼崎市武庫之荘4－30
	近藤三	〃（精密）	大阪市阿倍区松崎町3－127
法経学部	田島汎	新4（経）	芦屋市宮川町13（芦屋2210）
	山本光二	新3（法）	芦屋市大原町95（芦屋3629）
文学部	由比浜哲也	新4（佛文）	西宮市今津六石町1845
北校	宍戸元	M2	豊中市石道寺2705（曲直部方）
	広橋茂	L2	西宮市末広町5
	佐野守昭	D2	神戸市東灘区本山町中野御前56（金尾方）
	藤井博	T2	大阪府豊能郡箕面町今宮257
	田村忠雄	M2	茨木市元町1555
	鷲沢忍	T1	池田市城南町粤霊公社内
	李中勝	〃	大阪市旭区新森小路中2－101（渡辺方）
	木村裕	J1	大阪市城東区放出町356
南校	佐谷誠	M2	大阪市東住吉区平野洪町3－11
	辻川	S2	
	佐藤森彦	L1	大阪府中河内郡布津町鴻池新田，阪大鴻池寮